

茨城論壇

下条綾子の生家は、筑波野の広大な中であって、裏筑波を望む名峰の景観地であり、筑波筑波は何よりも身近な存在であった。綾子は、1904（明治37）年2月25日、真壁郡古里村下里谷十一番屋敷（現在は筑西市下里谷601番地）の素封家の6人きょうだい（ふじ乃、豊、義廣、亮三郎、貞徳、綾子）の末娘として生まれた。下条家は「吾妻鏡」にも出てくる旧家であり、常陸下条の流れをくむ家柄で字名を打出といひ下条本家として立派な長閑門のあるたたずまいである。父の泰次は、村長を務めた。母のよしは、大園村（現在は桜川市）狩野勝八郎の二女。長兄豊は

茨城女子短期大名譽教授

小野 孝尚



詩人・下条綾子の生涯

医師となり、長女ふじ乃の夫は県議員。兄の豊は、若年時は詩を書いていた。おひの大島久重は県議員。おひの下条正雄は元下館市長で北川冬彦主宰「時間」の同人であった。両親は、教育熱心で特

女子大に学んでいる。綾子は当時の帝国女子医学専門学校を合格するほどの学力を持っていたが、文学好きが高じ、16歳の頃から創作活動が始まったといわれる。22（大正11）年12月1日から小川芋銭・横

校4年生の夏休みに長兄の病院で過した時に見聞したこと、を短編小説に書き、「文章俱樂部」（9月号）に投稿し、優秀作品となった。

しかし、女学校の慣れない都会生活から肋膜炎を患い、

市出身の弁護士、鳩貝栄一郎と結婚。鳩貝は、旧制の水戸高等学校、東京帝国大学法律学部法律学科の卒業で、後の衆議院赤城宗徳と同期。綾子は一男一女をもうけ、44（昭和19）年、太平洋戦争が激しくなり、家族で実家の下条家の書院に疎開した。45（昭和20）年7月には、夫が突然心筋梗塞で亡くなってしまっ

に末娘に対する愛情には格別なものがあった。綾子もまたこれに答えようとした。綾子は、古里中学校から日本女子商業学校に学び、さらに日本

瀨夜雨・山村暮鳥・野口雨情が監修者となって水戸から発行された文芸雑誌「郷土」に詩を発表しているようであるが、未見である。同年の女学

生家に戻り療養生活に入る。ことなり、回復後に再び上京し、東京本郷のアパート弥生荘の1室を借り父からの仕送りのある文筆活動に入った。この頃の様子を「現代文藝」（30（昭和5）年11月1日第7巻第11号 素人社書屋）「秋の花東—女流日記集」の中で、「歩」と題して心境を書いている。「いよいよいるはからし直した。詩も歌も、否、何も

生田花世、水町京子、竹内てるよ、後藤八重子、下条綾子、英美子、北見志保子、岡村須磨子の8人であった。

詩作品の発表は、川路柳虹の「炬火」や佐藤惣之助の「時之家」に寄せ、交友のあった詩人には、梶浦正之、井上康文、草野心平、英美子等がいた。その一方で、横瀬夜雨からの指導等も受けていた。32（昭和7）年12月、下妻59歳であった。

おの・こうしょう「茨城女子短期大名譽教授」1994年生まれ。水戸市在住。大正大学大学院文学研究科博士課程単位取得満期退学。茨城女子短期大学学長。2017年「茨城の近代詩人群像」、19年「幼児教育・女子教育の先達 豊田美雄とその時代」を茨城新聞社から出版。茨城の文学研究をライフワークとし、豊田美雄の教育理念の次世代への継承と顕彰活動に努めている。